室生犀星の明治期小品文

星野晃一

(1)

室生犀星の初期の文学活動をみると、多くの作家がそうであったように、犀星にもまたその習作期にはいくつかのサークルに参加しての文学修業があった。それは、たとえば俳句[注1]における「風蘿団」「敷島文盛会」「北声会」「月之会」「四高俳句会」、また、短歌[注2]における「二葉会」などという小集であり、それらのグループの一員として主に『政教新聞』（『北陸新聞』の前身）『北国新聞』という地方紙に多くの作品を発表している。また、尾山篤二郎らと結成した北辰詩社[注3]の機関紙『響』への詩・俳句の発表もある。また一方で、投稿作品も多い。前記二紙のほか『少年世界』『文章世界』『新声』『中学世界』『文庫』『中央公論』『趣味』『中学文壇』などの雑誌への投稿である。そして、それら作品のジャンルが多種であるのも、多くの作家たちの初期の姿に共通する現象であろう。犀星の場合、ジャンルは俳句、詩、短歌、小品文の四種を数えることができる。

ところで、これらの作品は、当然のことながら犀星が創作主体を形成していくその成長過程を知る上での適当な、そして貴重な資料なのである。本稿では、初期文学活動の中で特に小品文を取り上げ、それを資料的に整理し、それらについて思うところを述べてみるつもりである。その前に、他のジャンルとの関係で小品文の位置を確かめておきたい。

かつて、三浦仁氏は『露風・犀星の抒情詩』（秋山書房　昭53・3・31）の中で、犀星が『抒情小曲集』の独創に達したのは明治四十五年十月『スバル』に「青き魚を釣る人」外三篇を発表して後のことであるという考えを示したが、この説はきわめて妥当なものであると思われる。そして、犀星文学の初期における独創を詩というジャンルにおいてみるというのは定説であり、そこで、三浦氏の指摘する明治四十五年十月という「時」は大きな意味をもつことになるのだが、それを意識した上で、犀星文学の明治三十七年から同四十五年（大正一年）までを、まず大まかにとらえてみたい。この時代に発表された各ジャ

ンルの作品数を図で示してみよう。この期間が大まかにいって習作期であることがわかるはずである。そして、この期間における小品文の位置をまず確認しておきたい。

	俳句	小品文	詩	短歌
明治37（15歳）	6			
〃38（16〃）	5	10		
〃39（17〃）	55	5	7	2
〃40（18〃）	179		3	23
〃41（19〃）	265	（1）	26	49
〃42（20〃）	33		9	
〃43（21〃）	8 (4)	(1)	1	1
〃44（22〃）	(5)	(2)	2 (13)	(12)
〃45（23〃）（大正1）			9	

○俳句に関しては『室生犀星句集—魚眠洞全句—』（北国出版社　昭52・11・30）に、小品文・短歌に関しては『室生犀星文学年譜』（明治書院　昭57・10・25）によっている。

○短歌で、明治四十年の23首中の3首と、明治四十一年の49首中の1首は改作あるいは添削された再出の作品。

○（）内は雑誌『薬事評論』に載った作品で、犀星の代作といわれるもの。なお、この内短歌に関しては、かつて「室生犀星の短歌（その一）」（『城西大学女子短期大学部紀要』第一巻第一号　昭59・2）で代作ではないと思われるという考えを示した。

○小品文の中にある明治四十一年の（1）作品は、短篇小説「宗左衛門」。

犀星文学は周知のとおり俳句から始まっている。「風蘿団松（ママ）（秋か）吟集(二)」中の一句として『北国新聞』に「水郭の一林紅し夕紅葉」が掲載されたのは、明治三十七年十月八日であった。同三十五年春から給仕として勤めた金沢地方裁判所の上司、川越風骨や赤倉錦風らの指導のもとに作句に励んだことは、自伝小説「弄獅子」「泥雀の歌」などにもしばしば描かれている。「まるで無学な人間がより集まって他人同士が植民地部落のやうに、一家族をつくりあげて」（「弄獅子」）いるような境遇にあった犀星にとって、当時の俳句がどういう意味をもっていたか。これについては奥野健男氏[注4]の述べるとおりであろうと思われる。つまり、犀星は「普通の文学青年のように社会のアウトサイダーとして文学に入ったのではなく」「むしろインサイイダーになるために俳句から文学に入った」のである。文学に励むことは犀星にとって「社会から背を向ける異端者になることではなく、社会の中の人並に入りこむ手段」であった。そして社会への「復讐」のためには、どうしてもその手段をわがものにしなければならなかったのである。その意欲がそのまま図に示した数量になっているとみてよかろう。

明治期の句数は五七〇（代作を含む）。全句の約三分の一にあたる数字である。特に明治四十、四十一年は年間句数としては文学生涯の中で最高である。しかし、生涯に一七四七句を発表し、俳句から「新鮮であるために常に古風でなければならぬ詩的精神を学び得た」（『魚眠洞発句集』の序文）犀星ではあったが、俳句は犀星文学の中心にはなりえなかった。この時期は、自己の文学を俳句の中に模索していた時代だったのである。『室生犀星句集―魚眠洞全句―』によれば、明治四十五年以降は大正十三年の一二三句まで長いこと俳句は発表されていない。

詩は明治三十九年二月十日『政教新聞』に掲載された総題「寒懐賦」（「雪の野」「熊の売子」「寒椿」「炉辺」「湯浴の女」の五篇）と「離別」に始まり、同四十一年を中心に同四十五年までに七〇篇（代作を含む）が、『新声』への投稿を中心に、その他『文庫』『響』『中学文壇』『創作』『スバル』『北国新聞』などに発表されている。表棹影らの強い影響を受けながらも、習作期には、詩は中心ではなかった。やがて最初期の犀星文学の中心となるジャンルではあるが、固有のスタイルを確立する以前のいわゆる習作としての意味を含みつつも、数量の上からみると少ない。ジャンルを模索している時期であることを如実に示している。明治四十一年四月五日の『北陸新聞』に載っている、「青年歌人を評す（続）」と題した「ふみ」という人物の次のような文章が、この辺の様子を物語っている。

室生犀星　この方の最も得意なのは俳句でせう。初めこの方の歌も俳趣を及びて居て、余り面白くもありませんでしたが、近来非常に進歩しました。そして又新体詩もお作りになります。中々の才人です。（略）

当時、俳句の主に対しては詩は、そして当然短歌も従の位置にあったのである。ところが、大正二年になると、一挙に六五篇、翌三年には八三篇の詩が発表され、以後詩人としての道を歩むことになる。

ところで、犀星自身の詩作に対する意識はどうであったか。後年『群像』（昭30・7・1）に発表した「ちつぽけな事から」[注5]の中で、犀星は「先づ詩をもつて身を立てようといふ気が『新声』が詩をのせてくれてゐることで、出来たといへるかも知れない」と書いている。

明治期、『新声』に掲載された詩は次の二三篇である。

明治四十年

「さくら石斑魚（うぐひ）に添えて」（七月）「むしうりのうた」（十一月）

「其手よ」（十二月）

明治四十一年

「死の日」（二月）　「モデル」（四月）　「匕首」「灰」（六月）

「地震きたる」「針」「灰色」（七月）　「藪の枯るゝ日」「蚊よ

啖れ」「美人草」（八月）　「心の鼠」（九月）　「五位は啼く」

（十月）

明治四十二年

「胸の日の暮」「水晶」「煙草のおもひ」（一月）　「足袋」「母」

「亡骸の国」（三月）　「夜のしづく」（五月）

これでみると、「『新声』が詩をのせてくれてゐる」頃というのは、明治四十年の終わりから同四十一年にかけての頃ということになろうか。なお、この明治四十、四十一年の二年間については、後でまた触れる。

短歌は犀星文学の中で常に完全に傍流であった。この事実については、すでに『室生犀星の短歌――資料――』（城西大学女子短期大学部文学科「学術研究叢書2」昭60・12・25）に示してあるので詳しくは触れない。

明治期の短歌も七一首（再出の作品四首、および代作は含めない）と非常に少ない。しかし、この短歌にはまだ明らかにされていない問題が含まれている。小室善弘氏[注6]の「鬱屈した情念の表出、想像力の解放という面から見れば、和歌は俳句よりもはるかに作者その人の内面の気息にかない、そのまま詩にはこばれていって異和を感じないまでに心情に密接してい」るという、犀星の初期短歌に対する指摘は確かなものであろうと思われる。習作期の俳句・詩についての考察は比較的多くみられるのに対して、短歌は少ない。後日の課題としたい。

明治期の短歌は、明治四十、四十一年に集中している。この傾向は他のジャンルにも共通している事実である。明治四十年には犀星も十八歳になる。尾山篤二郎、表棹影らとの文学的な交流が盛んになったのもこの時期である。中央誌『新声』に、「稲の闇地蔵祭の灯赤し」の一句が初めて載ったのが明治三十九年十二月であり、先にも記したように、「さくら石斑魚に添えて」の詩が同誌に載ったのが明治四十年七月である。この詩は児玉花外の選で首位になった作品であった。犀星の喜びは並大抵のものではなかったろう。その上、犀星は花外から激励の手紙をもらって、さらに感激し、歓喜する。この様子は自伝的小説「性に眼覚める頃」の叙述によってもうかがわれる。尾山篤二郎らと北辰詩社を結成したのがちょうど同じ七月ごろであり、北辰詩社からは機関誌『寒潮』、続いて『響』が出される。文学青年たちが頻繁に交流を重ね、たびたびの集会を開く。いわば習作期の中での興隆期であった。

ところが、やがて犀星の周囲に、そして犀星自身の生活に変化がみえ始める。明治四十一年六月、俳句の師の一人であった藤井紫影が第四高等学校から第八高等学校へ転任する。同年八月には赤倉錦風が裁判所を退職して上京してしまう。同四十二年四月二十八日、犀星に大きな影響を与えた詩友表棹影が死去する。犀星自身、明治四十二年になると金沢を離れて金石に転任し、同年九月ごろにはついに退職する。短い習作期の中で最も盛んな二年間は、このようにして終息に向かうのである。そして、文学に生きる決意をもって犀星が上京する明治四十三年からは、図にあるように極端に作品が減っていく。

さて、このような状況の中で、ここで取り上げようとする小品文はどのような位置にあるか。図によって、作品が明治三十八、三十九年に集中していることがわかる。つまり、すでに明らかなように、小品文は先に述べた習作期の中での興隆期ともいえる明治四十、四十一年の前の時期の営みであるということである。ゆえに、この時期の小品文は、孤独な少年が文学に魅せられ、創造する喜びを発見していく最

初期の姿を、純粋なままにみせているのである。短絡的な判断を避けつつ、犀星文学の本質にかかわるようなものがそこにあるかどうかを探ってみる価値は、十分にあると思われる。なお、「宗左衛門」については、小品文との関係で後で触れるが、資料としてはここに掲げない。

新潮社版『室生犀星全集』の「月報第八号」に、「犀星先生のこと」という題で田辺徹氏が次のように書いている。

私の父は金沢で先生と同じ町に生まれた、いわゆる幼友達であった。父が書きのこしたもののなかに、ときどき犀星先生のことがでてくる。それによると、先生は養家の雨宝院の賽銭のなかから勝手に『少年世界』や『ハガキ文学』を買ってきて、それを父の家にあずけて二人で読んでいた、ということである。そしてこれらに短文を投書し始めたが、みんな没になってしまうので、すっかり絶望した犀星少年は、雑誌の挿絵の模写に熱中して、将来絵描きになると誓っていた。

ここに書かれている「時」は、投書のごく初期のころ、おそらく明治三十七、八年のことであろう。『ハガキ文学』の創刊は明治三十七年十月（終刊は明治四十三年八月）であった。なお、『少年世界』の創刊は明治二十八年一月（終刊は昭和九年一月）。小品文は、明治三十八年三月四日『北国新聞』への投稿から始まって、同三十九年七月二十四日『政教新聞』への投稿を最後に、短歌へ移行するかのごとく消えていく。約一年四か月の間に一五篇が発表されているのである。

注1　「風蘿団」は、川越風骨・赤倉錦風ら犀星が給仕として勤めた金沢地方裁判所関係者たちの小集。「敷島文盛会」も同じ。「泥雀の歌」に雑誌『敷島文盛会雑誌』を出したとある。「北声会」は、明治三十八年七月ごろ藤井紫影・吉倉水央らを中心に再興された小集。「月之会」は不詳。「四高俳句会」は、藤井紫影を中心とした第四高等学校関係者たちの小集。これらについての関連記事は『政教新聞』『北国新聞』に見ることができるが、それらについては共編著として著した『室生犀星文学年譜』（明治書院　昭57・10・25）の中に記してある。

注2　「二葉会」は、尾山篤二郎、室生犀星、田辺孝次、表棹影、佐野浪子たちの小集。明治三十九年末につくられ、同四十年六月ごろ解散。これについても『室生犀星文学年譜』に触れてある。

注3　「北辰詩社」は、明治四十七年七月ごろ、尾山篤二郎が中心となって、室生犀星、表棹影、下田呂陽など、「二葉会」とほぼ同じメンバーでつくられた小集。機関誌『寒潮』を同年十月に創刊（『北国新聞』明40・10・15、同40・10・19の記事による）。『響』は明治四十一年十月二十五日に創刊された北辰詩社の機関誌。第二号まで出される。これらいずれも『室生犀星文学年譜』に触れてある。

注4　『日本文学全集33　室生犀星集』（集英社　昭43・3・12）の解説「作家と作品」。のち『奥野健男作家論集②』（泰流社　昭52・5・15）中の「室生犀星」に「2作家と作品」として収録。

注5　「文学に目ざめた頃」という編集者題で五人の作家が書いているうちの一つ。ほかに『文章世界』と回覧雑誌」（上林暁）、「無人飛行機」（田宮虎彦）、「文学開眼」（井上靖）、「芽の出る頃」（平林たい子）。

注6　『俳句』（角川書店　昭60・10・1）に掲載された「文人風雅⑦――室生犀星(1)――」による。

(2)

次に、紙誌への掲載順に一五篇の小品文を紹介し、その後でそれらの小品文について思うところを述べることにする。各小品文の初めに、1～15の番号を付し、これを後で利用することにした。また、各小品文の後に、1掲載紙誌名、2掲載年月日、3筆名、4参考事項を添えておいた。

1　寒い月

「兄上ッ。」「オゝ弟かッ。」

「残念、やられたッ。」

「オゝッ、敵は此の兄が討つて遣る、安心せい。」

犇と相抱く二兄弟、一は天を仰いで声なく、一は地に伏して音なし。

遠近に聞える大砲小銃の音！。

寒い凄味を帯びた月は、独り淋しく光って居る!!!。

1　北国新聞（三面）

2　明治三十八年三月四日

3　金沢　照文生

4　「募集短文」欄に掲載されたもの。

2　祈願

雪を交へた寒風は、さつと拝殿の棟を掠め、山か森か、四辺は暗憺として只もうう玉の暗である

ザク〳〵と凍れる雪を、白き脛に踏みしめ〳〵、やつと辿りついた手弱女一人。南無守らせ玉へ、皇軍の勝利……吾夫の無事……。

神物伝はず、声は微かに、あとは唯だ黒暗々！。

1　北国新聞（三面）

2　明治三十八年三月十七日

3　金沢　照文生

4　「募集短文」欄に掲載されたもの。

3　行く春

机の上に生けた花も桜でなうて行く春を惜む牡若の一輪咲で我は美し

い春が今去るのを惜んで此処公園まで杖を曳いたのであるが桜は名残も止めで樹々の梢は何時しか欝蒼たる緑衣を着て鶯の声も老いたらしく花と云ふ花は珍らしく唯清い流れの小川に漸く春の色香を偲ぶ牡若独りそよ吹く風に戦いで居る。

哀れ四季中に最も人に愛されたる春も刻々迫まつて又暑い夏とはなるのであるアゝ葉末に宿る玉露も草や樹の涙と我は見るのであつた楽しい春も今行くのである。

1　少年世界（第十一巻第九号）
2　明治三十八年七月一日
3　加賀国金沢市千日町一番地　室生照文
4　「少年文壇」欄に掲載されたもの。

4　夏の夕

涼風一陣、橋上に彳む我顔を撫で去つた、犀水の流も赫々の日に水やせて漸く蛇籠を潜る響の妙なり、美しき夕栄も薄らんで全く夜に入らうとするに、小暗い柳の蔭から蝙蝠の飛び合ふ影は露になつて、水は清く瀬の下に溜りて香魚の跳ねる音も聞える。

何処からか明笛の声が聞える、虫の鳴く音も橋のたもとの氷屋の氷をきざむ音も至つて涼しい。

たゞ哀れなは草間僅かに残 光を泄らす蛍よ空には星が二ツ三ツかゞやいて夜は至つて凄くなつて来た。

1　北国新聞（三面）
2　明治三十八年七月十八日
3　照文生
4　「乗合船」欄に掲載されたもの。

同欄の終わりに「罪のない、面白い、可笑しい夏向の淡白したお話、又は小品文の類を募集す但し余り長いのはお断り」とある。

5　雨後の景

はげしい白雨は庭の樹や草を一洗して、心地宜く霽れた、未だ梢の葉から雫が落ちて、蟬の声が一層喧ましく耳を聾するばかりに啼き立てゝ居る習々と吹く涼風は裏の田圃から送り来て、予が白衣の裾を払つて居る。萎かゝつた草も木も生々として風にゆらいで、一輪の車百合は清い露を花弁にのせて、触れなば砕けやせん風情である。

仰げば夕日の光まばゆく、機業場の瓦斯燈に反射して恰も火の燃えるやう、遠く田畑つゞきの林の末まで、田の面の日を受けていと美しう。節面白き歌唄ふて、家路を急ぐ里の人、夕餉の煙は川端柳に霞んで居る。

空には星二ツ三ツきらめき初めた。

注
1　北国新聞（三面）
2　明治三十八年八月三十一日
3　照文生
4　「乗合船」欄に掲載されたもの。

「節面白き……」のか所は改行部分。

6　晩夏

夏暮れんとして川も海も最早見向く人なし秋気は遍く野山を籠め、淋しき思を誘ひ哀の気を惹き、水は澄て天（に）清らの月あり、山将に紅を吐（か）んとして時を待ち顔なり。あゝ細き竹を力に咲ける朝顔も、下葉枯れて花輪小さく夏漸く暮れんとす。

注（に）（か）は推定して補ったもの。

1　北国新聞（三面）

2　明治三十八年九十二日

3　照文生

4　「募集十行文」欄に掲載されたもの。「十九字詰十行以内」の条件が付記されている。

7　秋風の巻

荒涼しき秋風の吹く儘に、我が遊びの庭もやゝ淋しき秋の色深くなりぬ。

日毎に掃けど落葉堆く、築山の楓紅梢見頃なり、秋風の音づるゝ毎に薄の戦く様絵の如く、春の花の如き濃艶の花無けれども清きさま世に馴れぬ早乙女の如し。

此のさびの籠れる我が庭に床しき香をこむるは琴教ふる隣家の木犀の高き香なり。

淋しき庭も香あり、されど我に香無きを、嗚呼！。

1　北国新聞（三面）

2　明治三十八年十月四日

3　てりふみ

4　「募集十行文」欄に掲載されたもの。条件も同じ。

8　秋月の巻

銀色清らに凝たる今宵の月に、いでや昔の記憶を辿どらばやと、やをら泣菫が詩集を打ひらけば、あはれ春暖かき頃挿みける菫の萎れはてたるを見ぬ。

あゝ記憶！そは水の泡なりき、菫！そは萎れはてぬ、予は遙に遠き天空に明かの星を見ぬ、あゝ星！そは我手に取る能はざりき。何ごとも知らぬ顔なる秋の月、高く九天に懸りて、夜は深く虫の音淋しくなりぬ。

1　北国新聞（三面）

2　明治三十八年十月十日

3　てりふみ

4　「募集十行文」欄に掲載されたもの。条件も同じ。

9　罪の子

夕嵐強き鉄橋の畔を逍遙ひぬ。嗚呼この鉄橋！如何に想ひ出多きようら若き罪の子らが、恋に絆され愛に駆られて、轟然たる汽車が下に長への恨を犀水の流に遺して、不帰の客となりぬ

嗟呼流水の音は永く無情の楽を奏で、死を誘ふ如き汽笛の声！

1　政教新聞（四面）
2　明治三十八年十月十日
3　照文生
4　「政教文学」欄に掲載されたもの。同欄の初めに「けふから当欄で政教文学の御披露をするのですから其御積りで何分よろしく」とある。藤田天民選。天民の評言「無限の感慨を叙するに、簡短の文を以てし、勁抜にして一字の冗繁を見ず、小品の上乗なるもの」が添えられている。

10　鈴ちやん

秋風肌寒くなるにつれて、稍々癒えかゝつた鈴ちやんの病気が俄□革つて、昨夜十時を一期として、彼の天国とやらへ逝いて仕舞つた。

鈴ちやんは色の白い、眉毛の濃い活発な僕の大好な親友であつた。鈴ちやんも僕を好きで朝な夕な遭はなかつた事無く、去年も学校を失敗た時に色々と慰めてくれたので幾程か励まされたか知れないのである。

鈴ちやんの好物は花と笛で、手植の花は今夏盛りに咲き匂ふて居るが、鈴ちやんは此夏盛りなのを観る事が出来なかつた、偶々笛を手にして鈴ちやんの為めに音を調へて見ても、無闇に胸が迫つて唯涙の落つるのみである、嗚呼鈴ちやんは、未だ僕の目の前に彷彿して、彼の美くしい声が耳朶に残つて、無邪気な姿が今も未だ僕を見て笑つて居る様だ。

明日は鈴ちやんの葬式である。

此の涙で参る事が出来るのであらうか。嗚呼鈴ちやんは明日は煙になつて仕舞うのである。

注　□は不明字のか所。
「鈴ちやんの好物は……」のか所は改行部分。

1　政教新聞（四面）
2　明治三十八年十月十四日
3　照文
4　「政教文学」欄に掲載されたもの。

11　犀川

嘵々として吹き初むる音は「神の秘」の一曲或は高く、或は低く、切切嘈々たり漸くにして曲終れば、東天微かに紅を呈して雲動きぬ。

嗚呼何等の美観！五色の彩雲を排きて生れいでたる明治三十九年一月元旦！而して我愛せる犀川に、黄金の波はゆらぎぬ昨日の我は新たなる天地の我なり、儚なき去年の歴史を焼き捨て、新たなる飛躍を試むべく、霊泉の水を一掬（す）れば忽として気澄み、神の如き心地になりぬ

注　（す）は推定して補ったもの。

1　政教新聞（六面）
2　明治三十九年一月二日
3　照文
4　六面の下隅に載る。欄の名はない。

12 春雨の夜

淋しきは春雨の常ながら、わけて、今宵の何となく物悲しくて、筧をほとばしる水に耳の聡くして心いと魅せらるばかりなり。

この頃は猫の恋するときにやあらむ、夜な〳〵を猫の鳴き声をそろしく、たまり兼たる我の大声あげて叱すれど、依然として止まず、先刻、母上は用事の為に町の方まで行かれてまだ帰りたまはず、広くもあらぬ家に、我一人影長く襖より疊に落して、□々も油の尽くる燈火の下に悄然として冥想しぬ。やがて机に向ひ歌などものすれど、重たき頭のなどか詩趣湧くべき、筆擱きて反古など取調ぶれば、古き筆記帳に教師の手の跡、学友の姓名など記されて、座ろ昔の懐かしく、我と仲善りし柳君の今何処に何しつゝあらむ、彼の家には六つばかりの妹の、我とうち戯れしなど偲ばれて独りほゝ笑を禁ず能はざりき。

さるほどに母上の、みそぼらしき少女を伴ひ帰り給へば我は「其少女は誰なるや」と問ふるに「今かへり路にて此の哀れなる少女の他家の軒に慄へるを見てあまりの哀れさに斯くは連れ来つるなり子よ心あたり無きや、今宵は宿めて明日は市役所に届くべし」と言ひたまひぬ。

母上が後に小さくも固まれる乙女を見れば、歳は十四五にもなりつらむ、顔だちなど上品なるに引変え着衣の処々破れあかにじみあわれにも痛はしき姿なり、我はふと見覚のある顔なれば、火をかきたてゝよく見ぬるに、あわれ友が妹ならむとは……。

夜も更けぬれば母上と我と少女と枕を並べていねぬ、さつき名のらむと思ば矢よりも早まれど、母上の前なれば、如何ともなすすべもなく黙したるに、いま幸ひ母上の能く寝給ひしかば、傍なる友が妹の名を呼びぬ、少女は細き眼をひらきて不思儀に我が面を眺めぬ「君ちやんよ我を見覚えあるや否や、我は貴女が兄なる柳君となかよく、遊びに行きし折はまだ貴女は六つなりければ我とたわむれし事のあり忘れじや」と言へど返事なく顔に微かなる愁の色を排して笑を洩らしぬ。いくたび言へど答へなし。

解したりぬ、彼女は唖なりき。

何故に唖になりしやと問へどこたえず花の如き顔もてあわれ不具者とは……我は何故に浅ましき乞食になりしや、何故に不具者になりしや、何故に豊かなる彼の家はをちぶれしや、兄は何処に居るや、優しき彼が母のいかにせしや、を、問ふ能はざりき。

嗚呼彼は不具者なりき。

注 □は不明字のか所。（？）はルビ不明のか所。
「母上が後に……」のか所は改行部分。

1 政教新聞（六面）
2 明治三十九年三月八日
3 室生犀星
4 「政教文学」欄に掲載されたもの。

13 河辺の初春

乱れ伏せる芦蘆は秋のまゝになれど、水を抜く三寸の青芽を見ずや、破舟を操る舟子が蒼々として濶き初春の空を仰ぎて晴雨を窺ひ、軈て

は櫓声と欸乃と和して無限の清韻を齎らすを聞かずや。

永き冬籠に欝々たりし頭悩も、一度犀川の下流に彳めば、宇宙の大気は爽に頭を沸ひ、沈思せる冬の長き夢は醒めたる如し。東に医王の峯白く、南に倉ヶ嶽翠に、秀姿暗に春を黙示して、堤上堤下春草微笑みつゝ、傾く夕日は血潮の如く野に山に水うつりて、遠村の景、絵くべく、幽に村歌一曲洩れぬ。

1　文章世界（第一巻第一号）

2　明治三十九年三月十五日

3　石川県加賀国金沢市千日町ノ貳　室生残花

4　「文叢」欄に掲載されたもの。評言「漂渺たる文致、思はず人の心を誘ふ。」が添えられている。「泥雀の歌」で犀星は選者を西村渚山と書いているが、『文章世界』（第一巻第一号）にはその名が見えず、不詳。したがって、評言はだれのものか不詳。

14　春興

（一）

そぼ降りし春雨の小歇なく其瀟々たる音に和して、妻琴の音色、低く細くいといみじう流れ聞ゆ、窓を推せば庭の梅花、ひら〳〵と蝶の舞へるが如く散りぬ、

さゝやかなる楓の若葉の露一滴、下の葉蘭に落ち、あいらしき小蛙の、その滴を吸ひ、初々しく鳴く

（二）

雨はれて美しき藍色の空に、鳶一羽悠々として輪を描き、医王の峯、未だ雪は消えねど、春風やうやく暖にして興そゞろ禁じがたく野にいでぬ。

翠の氈を敷きたらむが如き野に、斑々たる紫紅の花、さながら絵の具を零せし如し、淡赭の土筆、其穂を列ね、我をして罪なき昔を思はしめ、菊にも似たる浦公英の花は其長き茎に翳され、蝶を待ち顔也小川の水清く葺の芽の簇々として生ひ、茜色なるを蟹の横這に走るも可愛し。

（三）

右は黄色限りなき菜の畑、幾十の蝶群れて争へり、左は翠色凝つたる麦田、隅々我が足もとより衝と雲雀たち、雲井遙に見えずなりぬ、されど銀鈴を振れるが如き声、野にあまし、

（四）

庭にいでゝ菫を鉢に植ゆ、椿は紅の玉を綴り、梅は早や片々として散り、鶯の声きかぬは遺憾の趣なり

嫁菜のび蓬しげり、赤き蕗の薹、茶畑の右に生ひて蕗は小さき翠傘をかざし漸く庭も春の趣を添えぬ。

仰げば、杏の薄紅、ひろく咲きいで、桜なきは怨也

（五）

日は暮れむとして西の空、一面（臙）脂を溶かせし如く、まだ生々しき新築の小家に照りて愈々紅也

塘の裾して見れば、蝙蝠舞ひて里の子、長竿を携へて是を落さむとす、一人の老僧、徐ろに是をさとし教へぬ。

子らの去りたる後に、老僧こゝちよげにほゝ笑み、霞こむる松並木に姿かくれ、夕の鐘、静かに響き、幽かなる牧笛の声すなり。

注　（𪗋）は推定して補ったもの。

1　政教新聞（六面）

2　明治三十九年三月二十七日

3　犀川の畔にて　室生犀星

4　「政教文学」欄に掲載されたもの。

15　山寺の宿

慣れぬ旅路に行き暮れて、とある山寺に一と夜の宿かりしある初夏の頃なりき。

案内せらりし禅房のいとあれたるに、床に掛けある絵巻物の、いまにも燃えむばかりなる不動尊、虫ばみし襖のいと古風めける、一つより二つとわれは古き詩趣に打れぬ、不図庭もせを眺むれば、卯の花白う波の泡の如きに、閑古鳥空を啼きわたり、渓川より湧くが如き爽涼の風、われはこの掬すべき涼味に誘はれ出ぬ

恰も残照の空、その紅に染められし鐘楼に、夕の鐘つかむと立ち上りし若僧ひとり、遙に塵の世を俯して黙想沈思奥の院なる読経に俄然と愕き、一打二打余韻長う撞き給ひぬ、われは何となう懐かしさに近寄りて、今宵の宿乞を謝せば、彼又答へ□話題をめぐらす裡に、十年の知巳の如く満腔の不平を吐露しぬ、彼は青春の半生を洩らしぬ、其は亦わが為には鋭き刃にて、胸を刺されしも辛かりき。

「旅の君よ、ゆくりなく今宵御宿を貸せしは奇しき縁に候はずや、われは君を骨肉と思ひ五年前のわが恋を語り申さむ、そはげに甘き恋にて候ひき、清瀬川の畔なる水田と言へるは富豪の旧家にてそこに眉目美はしき少女居たり今宵の如く月なき闇の夜にて候ひし、漫歩にまかせて清瀬川に来りしに、蛍狩とて都大路も及ばぬ賑やかさ、あるは歌ひ、あるは走り、一疋の蛍飛々として闇を縫ひいでぬ、少女らはわれ先にと群りより□その中の誰ならむ、足辷らして川に落ち入りぬ、われは衣のまゝ彼を救ひて家に届けぬ、夫れより数月、訪ひつ訪はれつ、われは彼を愛し彼はわれに許したりき、しばし希望の花蔭に、密より甘き恋を讃美せしが冷かなる悪魔の咀ふ的となり、彼はさる家に嫁ぎぬ、年ふる毎に彼は再びわれを顧みざりき、察し給へ、その時のわが心は、彼を取殺さで置くべきかと恨をのみて黙せしが、ある月闇き夜、浅き心に恥ぢて、遂に俗念を仏ひぬ、されど心の駒の跳るは、さるにても哀れのものとおぼさずや

と若き血潮の堪へ難う、銀帯の如く光れる、遙かなる清瀬川を睨みしが、やがて淋しう苦笑して、一揖の後本堂さして行きぬ

嗚呼夫は誰ならむ乎、われはその夜足音をぬすみて山を下りぬ、その夜、月なく星まばらなりき。

注　二か所の□は不明字のか所

1　政教新聞（六面）

2　明治三十九年七月二十四日
3　犀川の畔　犀星
4　「政教文学」欄に掲載されたもの。

1「寒い月」2「祈願」、この二作は興味深い対照を示している。両作とも日露戦争（明37・2～同38・9）のさなかに発表されている。しかも日露両軍が激突したいわゆる奉天会戦（明38・3・10）をはさんで、1は三月四日に、2は三月十七日に掲載された小品である。

1の空間は戦地であり、時間は月のある夜。登場人物は兵士である兄弟。弟の戦死の場面が、四段落の巧みな展開によって描かれている。人間界の悲劇を冷徹に見つめる「寒い月」を文題として、常套的な修辞はみられるものの、時代や年齢などの条件の中で総体的にはよくまとめられた小品文ということができるのではないか。やゝ時代小説めいた臭いをもつが、その会話文の巧みな使用には、後年の会話体小説を得意とした犀星を思わせるものがある。

2の空間は神社の境内、時間は闇の夜。登場人物は夫を戦地に送っている女性。闇の中、氷った雪を白い脛に踏みしめて拝殿にたどりついた手弱女は、皇軍の勝利、夫の無事を祈る。これも、三段落に無駄なくまとめた巧みな短文である。

戦死、戦争は、時代のテーマであった。この二作が掲載されている『北国新聞』には、戦争を扱った記事が当然多い。小品文を掲載している三面は、「大和魂」という見出しで石川県出身の兵士たちの戦死の様子を、その兵士たちの経歴、戦歴などを含めて、詳しく報じている。掲載されている犀星外の小品文にも同様のテーマがみられる。犀星の小品文は、まず、時事、そして人事の関係から始まっているのである。

また、両者とも口語体である。出発において口語体を選択したということも注目される。やがて自然主義文学が確立され、口語体が大勢を占めるにいたるが、その前の微妙なこの時期に口語体を選択したということである。ちなみに、犀星の十五の小品文を口語体と文語体に分けると次のようになる。

口語体　1 2 3 4 5 10
文語体　6 7 8 9 11 12 13 14 15

時事、人事を口語体で巧みに描いた犀星は、小品文の最初において小説への方向性を示し、その可能性をはらんでいたといえよう。先の図で示した犀星の最初の短篇小説「宗左衛門」も口語体の作品であった。

なお、投書時代の犀星に大きな影響を与えたと思われる読書体験については、犀星自身「弄獅子」「泥雀の歌」「私の履歴書」などでしばしば述べている。時代的な関係や事実関係に多少実際とは違う点があるが、おおよその姿をとらえることはできる。それによると、やはりごく初期の段階は散文であった。尾崎紅葉「金色夜叉」、村井弦斎

「日の出島」、小杉天外「魔風恋風」、『少年世界』での巌谷小波、そしてわからぬままに手にとった黒岩涙香『天人論』、高橋五郎『宇宙観』などであった。これがやがて、横瀬夜雨、蒲原有明、薄田泣菫、土井晩翠、島崎藤村、児玉花外などの詩へ移る。また、この時期には大町桂月、徳富蘆花などの文章にも親しんでいたらしい。これらの読書体験は、ごく短い文章である小品文との直接の関係では考察すべきではあるまい。ここでは、先に述べた「小説への方向性」との関連をみるにとどめておきたい。

先に引いた「ちつぽけな事から」は、次のような書き出しで始まる。

徳富蘆花の「自然と人生」という美文集が、私の十五六歳の頃の愛読の書物であつた。この書物はどれだけ繰り返し読んだか知れない、何時もあたらしく美しかつた。私はこの文体を模倣して「少年世界」といふ雑誌に投稿して、掲載された時に自分の名前と印刷された文章に、異様のかがやきを感じた。いまの私を遠くおもひやると、実に可憐な「少年世界」に出た十五六行の文章だ、額ぶちにはいつて私の古い家の中に見えている、そもそも文学を勉強しようとしたのも、そんな、ちつぽけな、ばかばかしい事がらが歳月とともにふくれ上つたものに、片づける方が私にとつて偉さうに思へる、ものの動機といふものは極めて、ちつぽけな事から生じるものである。

これによると、3「行く春」は「自然と人生」の文体の模倣であり、「文学を勉強しようとした」きっかけになった小品ということになる。やはり、初めて中央誌に掲載された喜びは、そのまま意欲とかすかな自信に結びついたということであろう。

ところで、先の1 2の小品文は時事、人事に関する内容の文章であったが、3は自然、移りゆく季節の瞬間をとらえての感懐、惜春の情が描かれている。大まかにとらえると、十五篇の小品文は、このように主に四季の風物、季感や、鳥・虫・魚などの小動物を描き、それに加えて感傷的な心情を抒情的に述べた文章と、先の1 2のような種類の文章の二種に分けることができる。それを次に示してみよう。

主に人事関係　1 2 9 10 12 15

主に自然関係　3 4 5 6 7 8 11 13 14

後者に触れてその特色をとらえてみたい。このグループの中から、3「行く春」と同年同月に発表されている（3の執筆・投稿は晩春であろう）4「夏の夕べ」を例にとってみよう。

4は、夏の夕べから夜にかけてのきわめて短い時間の中で自然が見せる微妙な姿を、感覚的につづった短文である。夏の夕べの涼風（触覚）、犀水の蛇籠を潜る妙なる響き（聴覚）、夜に入る直前の夕栄の中に飛び合う蝙蝠の影（視覚）、清い瀬に香魚の跳ねる音（聴覚）を描いた第一段落、明笛の声、虫の音、氷屋の氷をきざむ音（聴覚）を描いた第二段落、草間に残光を泄らす蛍、空に輝き始めた星二つ三つ（視覚）を描いた第三段落から成る風物詩である。3ほどの気負いは

なく比較的素直に書けている。

三浦仁氏は、先にも挙げた『露風・犀星の抒情詩』の中で⑬「河辺の初春」に触れて、「このわづか一〇行ほどの稚拙な短文の中に『行く春』以上に後の犀星の、とりわけ『抒情小曲集』時代の彼の、詩の発想方法と主要モチーフとの原型を私は見るのである」と記しているが、これはすでに④「夏の夕べ」に見えているといってよかろう。いや、このグループのすべての小品に、程度の差こそあれ指摘できることであろうと思われる。四季折折の金沢の自然とその推移の姿、そして鳥虫魚の小動物など、これらはやがて犀星が描き続けることになる対象であるが、これらを、表現に未熟なものをもちつつも、自分の眼と心でとらえようとしている姿勢は確かなものであろう。そして、小品文は明治三十八年から同三十九年にかけてのほゞ一年間を描いているのである。

他方のグループの小品文をみてみよう。⑨「罪の子」は、失恋と死についての感慨をやや観念的に描いたもの。⑩「鈴ちゃん」は、少女の死の悲しみをひどく感傷的に描いたもの。⑫「春雨の夜」は、友の妹でかわいそうな唖の少女に対する同情を描いたもの。⑮「山寺の宿」は、恋の妄執から解脱できない若僧への同情を描いたもの。これらの小品にも、後年の、特に処女作といわれる「幼年時代」および「性に眼覚める頃」「或る少女の死まで」などの小説に通うモチーフを、単純な形で見ることができよう。

しかし、もう一方のグループに属する作品に対して、出来栄えという点からみると劣っている。感傷・情緒に走りすぎていて、ストーリーを構築し表現する力に欠けている。十五作品のうち終わりの方にストーリーをもった作品が集中しており、その傾向のまま小品文は書き収められているのだが、犀星自身あるいは行き詰りを感じていたのかもしれない。

資料としては提示しなかった「宗左衛門」は、⑮「山寺の宿」が発表された明治三十九年七月以後、散文修業があったのかどうかは不明であるが、同四十一年八月に二年振りで単発的に発表された作品である。現在確認し得た資料の限りでは、まさに単発的であるこの作品は、四〇〇字詰原稿用紙で五枚ほどの短篇であるが、これにはそれほどの進歩のあとはみられない。

宗左衛門は「私」の家に出入りしていた腕の確かな大工である。作品は次のように展開する。宗左衛門の妻お幾の頓死と宗左衛門の異常な悲しみ。過去にさかのぼり、宗左衛門の平凡な結婚生活と子供好きな人柄の紹介。これらは伏線として描かれているのだが、無理がある。続いて、父母の死という「私」の家の異変による「私」の生活と性格の変化が描かれる。そして、久しぶりに会った宗左衛門は「私」に、「櫟（「擽」の誤り）ぐつたい顔の、やはらかなほゝ笑をうかべて」若い女性と再婚したと話す。「さてはと怪しむ私の肉体に顫が亘つた間に、宗左はつかれたやうに、また若々しい歩きぶりに坂を登つてゆく」という一文で作品は終る。つまり、宗左衛門が前の妻お幾を殺したのではないか、という疑念を、簡潔に効果的に暗示して作品を終わらせ

るという手法を用いているのであるが、やゝ無理がある。

「宗左衛門」が『新声』に発表されたとき、本文題には「――過去の記より――」という添え書きがあった。あるいは、過去の事実を材料に用いた作品であるかもしれないが、「宗左衛門」を描き上げる力はまだ具わっていなかった。なお、この作品には当時隆盛であった自然主義文学の影響もみられるが、また、犀星自身が好む内容の話で、のちにこの系統の作品は『苦楽』[注1]『犯罪科学』『犯罪公論』などの雑誌に発表されている。

先に触れたように、「宗左衛門」発表後、小説は大正八年五月『文章世界』に発表された「抒情詩時代」まで書かれない。この時期、つまり「宗左衛門」を書いていただろうと思われる明治四十一年の春ごろ、犀星は散文の行き詰まりを自覚する一方で、「ちつぽけな事から」に書かれていたように、『新声』に詩が載せられて詩人として立つ決意をもち始めたのではなかろうか。

十五篇の小品文を概観してきたが、それぞれの作品に、犀星の、忌まわしい日常とは違った異空間を発見した喜び、そしてそれを必死に自分のものにしようとする努力・意欲を感じることができた。これらの小品文を、単に美辞麗句を並べた稚拙な文章として抹殺すべきではないということは確認できたと思う。やや美文調の個性的とは決していえないこれらの修業中の短文の中に、犀星の心理を、成長過程を見、後年の犀星文学の核となるものを認めることができたと思う。さらに、他のジャンルを含めた総体としての把握を課題としておく。

注1　たとえば『苦楽』には「女」（大13・12）、「姐妃伝」（大14・8、9）、「三階の家」（大15・12）、『犯罪科学』には「殺意」（昭6・6、7）、『犯罪公論』には「色魔ではない」（昭7・10～同8・1）などがあるが、これらはいずれも未刊行作品である。この内「女」「三階の家」は『室生犀星未刊行作品集』第二巻（三称井書店　昭62・5・28）に、「殺意」は第三巻（昭63・2・28）に収録されている。